

### ▲ 第三回特別企画展

## 「森鷗外展 をりをりの微笑」

10月5日(金)～11月4日(日)



明治時代、陸軍第十二師団の軍医部長として小倉へ赴任した森鷗外の足跡をたどる展覧会を行いました。

また、小倉滞在中に再婚した妻・しげとの間に作られた新しい(家庭)の姿も紹介。

「微笑みの人・鷗外」のあたたかな側面に親しんでいただきました。

展示資料約二五〇点  
入場者数二二二四人(イベント含む)

+++++  
平野啓一郎さん講演会  
「鷗外の『知』」  
9月25日(火)  
+++++

展覧会のプレイベントとして、北九州育ちの芥川賞作家・平野啓一郎さんの講演会を行いました。作家デビューの当初から、森鷗外への敬意を語ってこられた平野さん。自らの読書体験から、鷗外の光と影まで、物静かな雰囲気でお話くださいました。その後の反響も大きく、再度の講演を期待する声も多く寄せ

られています。

ある問題が起こる。それに關して鷗外は「真実を知る、真実を語る者」として議論に参加するのではない、今仮にこういう説がある、かりそめにこの説に従って説くけれども、それを説く者を「師」として崇め、ついていくわけではない—ということを言っています。

人間は知識や、世間で言われていることやなんか、そういう風に接すべきだと、鷗外はだんだん感じるようになったのです。

とある知識を盲信すると、人はそれに従って生きさせられる。これは非常に大きな危険につながる、彼はそう感じ始めます。

今、これを面白いと思って読んでいるから、その説を採用するが、そうでなくなれば別の説を採用してもいい。そういう態度で議論をするようになりま

す。一見、無責任な態度に見える。しかし、鷗外が亡くなって後、日本は急速に軍事国家としての道を歩み出しました。ある

一つの価値を絶対として信じよ、という教育が行われていくわけですが、そのような危険が生じたときに、鷗外の態度—知識にはいつの時代も流行り廃りがある、それはたった一つの絶対的な權威ではない—は、別な考え方という「自由」を人に許します。

鷗外の中で「真実」などというものは無い。「真実」はいつも論争の中で決定される。しかも、論争にどちらが勝つかは、その時の力関係による。まさしく、政治的な駆け引きの中でさまざまなのが決まっていくなのだと、当時の権力の中枢でしみじみと身に浸みて感じるわけです。

鷗外は最終的に、いかなる官権、勲章、叙勲もいらぬ、石見の人森林太郎として死にたい、と遺書に残します。墓には「森林太郎」以外の文字は彫つてくれない、との遺言を残します。これはどういう意味かと、昔から議論の的になってきました。

江戸幕府には、不完全ながら一種の連邦制、アメリカ合衆国のような統治システムがありました。地方自治が各藩の藩主にかなり認められている。従って、

藩を越えれば決まりが全然違っている。ある意味、地方分権的なことが江戸幕府では行われていました。

ところが、明治になって富国強兵を進めるため、非常に強力な中央集権国家が目指されます。東京が権力の極点となる。(東京)対(地方のその他大勢)という図式です。鷗外は、そのまさに「地方」から十歳で権力の中心・東京に移動してきます。

「鷗外の『知』」ということが今回のタイトルで、僕が語っていることですが、鷗外が藩校時代に学んだのは、いわゆる「教養」です。中国の古典のこういうことを知っている、あるいは、日本の古典文学にこういう話がある。そういった「教養」を身につけたわけです。これは最新の知識と異なり、政治権力と即座に結びついて議論される性質のものではありません。

今の学説では、この病気が細菌のために起こると言われても、次の世代では、いやビタミンCの欠乏のためだった、となる。

知識が常に流動的なんです。鷗外が東京に来てから身につけ